

甦える Fauchard*

中 原 泉**

Pierre Fauchard (フォシャール) は、1728 年に1冊の歯科医学書を著わした。彼は、この2巻からなる「Le chirurgien dentiste, ou traité des dents」(外科歯科医、もしくは歯の概論)によって、歯科医学史上にその名を残すことになった。

けれども、18世紀前半に臨床医として活躍した仏人の彼が、“歯科医学の父”として不朽の評価を得るまでには、死後160余年におよぶ紆余曲折があった。

それは、歯科医学の創始者をめぐる光と影の歴史であり、そこには、パイオニア Fauchard の活動と復活のドラマがある。

開業と外科歯科医

Fauchard が行動しはじめた18世紀初期は、ブルボン王朝の代表として太陽王とよばれたルイ十四世治世下の華やかなる時代である。巷では、charlatan (大道医者) や barbier chirurgien (理髪外科師) たちが、歯科医術まがいの療治をほどこしていた暗い時代でもあった。

彼は1678年ブルターニュ地方に生まれ、当初外科医を志したが、家庭がめぐまれず、海軍の外科見習生となった。当時医術を習うには、それが一番安上がりで手っ取り早い方法であったからだ。

艦上勤務についた Fauchard は、図らずもここで、歯科への第一歩を踏みだすことになった。

というのは、長い航海がつづくうち、乗組員たちはつぎつぎに歯肉粘膜からの原因不明の出血等に襲われ、軍医たちは潰瘍、歯牙脱落にいたるこの重篤な口腔疾患の治療に追われたのである。当

時、海上生活者にはこの壊血病が付きもので、海のペストとして恐れられていた。

そのため海軍には、口腔疾患に豊富な経験を有する軍医が少なくなかった。なかでも、艦隊の軍医長であった Alexandre Poteleret は、とりわけ口腔病に長じていた。Fauchard は彼のもとで、連日、歯牙や口腔の治療にはげんだのである。ここで若い Fauchard の天分と努力は、存分に発揮された。

後年彼は、著書の序文のなかで、外科学の基礎的知識を得ることができたのは彼のお陰であり、この有能な人物とともに行なった研究が、のちに自分を重要な発見に導いた、と教えをうけた Poteleret に感謝をこめて記している。

この生活は3年あまりつづいたが、艦上における実地修練は、平時の10年にも相当する体験であった。海軍を辞したときには、彼は臨床医として独り立ちする自信を有していた。

まもなく Fauchard はアンジェ市に居をさだめ、世紀末の1696年に chirurgien dentiste (外科歯科医) を標榜して開業した。

当時、chirurgien (外科医) はもとより、僅しながら dentiste (歯科医) も存在していたが、彼はそのいずれをも選ばず、両者を組みあわせた外科歯科医なる名称を造語し、それを自らの肩書としたのである。

それは、外科医とも歯科医とも一線を劃して、外科的素養につちかわれた歯科医 Fauchard に、もっともふさわしい呼び名であると自負したからであろう。そのときすでに、外科歯科という新しい専門領域を構築したいという、ひそかな野心もあったかもしれない。

ときに Fauchard 18歳、若さの気負いと思ひ上

* Revived Fauchard

** Sen Nakahara: Nippon Dental University,
Niigata (日本歯科大学新潟歯学部)

がりを超えて、世にでようとする彼の並々ならぬ気概を感じさせる。そこには、先駆者に共通する非凡な見識と進取の気性がみられる。

というのが、後世の識者の一致した見方である。すなわち、Fauchard は当初から外科歯科医を自称して世にたった——それは、歯科医学の先駆者の青年時代にふさわしい逸話である。

しかし、どうも腑におちないのだ。若き Fauchard 像に水を差すことになるが、18歳の彼にそれほどの先見性があったとは思えない。それに、Fauchard の造語といわれる *chirurgien dentiste* は、外科歯科医と邦訳されているが、これは直訳すれば“外科医歯科医”なのである。

文法的に言えば、外科(的)歯科医とするならば、*chirurgical (ale) dentiste* あるいは *chirurgique dentiste* でなければならない。当時、文法作法にはさほどこだわらなかったとも言えようが、それにしても、形容詞を用いずに名詞をつなげた造語は、いかにも不自然である。

そこで異説をたてれば——当時診療科名というものは未だなく、職業名を標示するのが通例であったから、思うに、Fauchard は開業に際し、*chirurgien* と *dentiste* の2つを標榜したのではなかろうか。新しいタイプの外科的歯科医を志したというより、当初は、外科もやるし歯科もやると、間口をひろげて PR したに過ぎなかった。つまり、彼は外科と歯科の兼業医としてスタートしたというわけである。

当時医者専門は内科医と外科医に分かれているていどで、*médecin chirurgien* (内科外科兼業医) も多く、兼業などは当り前のことであった。新規に開業する Fauchard にしてみれば、まだ馴染みのうすい *dentiste* だけでは心もとなく、周知された *chirurgien* を先に謳って、患者をよばなければならないという事情もあったのではないか。

それが、診療活動がはじまると、Fauchard の仕事は、自然に彼の得意とする歯牙口腔領域に重点がおかれるようになり、その稀少性も手伝って、歯科方面に力量ある外科医として頭角をあらわすようになった。やがて、外科と歯科の業務が

融合してしまっ、彼は、歯科をできる外科医なのか、外科をできる歯科医なのか、分別できない存在になってしまったように思われる。

そのため、彼を取りまく医者仲間や患者は、彼が名乗った外科医・歯科医の肩書を、所属不明の当人に重ねあわせてみるようになり、それが Fauchard = 外科医でも歯科医でもない外科(医)歯科医、という新奇なイメージを醸成していったのだろう。

やがて、彼にならって外科歯科医を標榜する者もあらわれ、Fauchard に奉られた個称 *chirurgien dentiste* が、仲間うちで頻用されるようになり、次第に一般にも滲透していったのではなかろうか。

現在、仏語辞典をみると、*chirurgien dentiste* も *dentiste* とならんで、歯科医を意味する用語となっている。Fauchard が二本立てのつもりで並べた2つの名詞が、ひとり歩きして1つの用語と化して普遍し、結果的には彼が造語した言葉と見なされるようになったと言えよう。それを Fauchard 鼻眞(びいき)の後人が、都合よく解釈して格好の逸話としたのであろう。

とはいえ、当初は兼業であったとしても、こうした過程のなかで、Fauchard は外科歯科医としての自覚にめざめ、自家薬籠中の歯科医術を生涯の業とする決意をしたに相違ない。それには、さほど長い時間を要さなかっただろう。そうってから彼は、いわば自分の代名詞ともなった外科歯科医の肩書を、臨床医として十分に活用したはずである。

アンジェとパリ

話をもどして、彼の開業したアンジェ市は、パリ南西約 250 km、西フランスの農業地帯アンジェー州(革命前の州名)の州都で、ロアール河の支流にのぞむ大学の町として賑わいを呈し、古くから地理的に重要な戦略地域にあたっていた。

彼はここを拠点として、外科歯科の名称を体した診療を実践していったのである。その熟達した本格的な歯科医術は、じきに市内の人々の注目をあつめた。乞われてナント、レンヌ、ツール等の

町へも出張診療におもむいた。評判をききつけて、遠方から彼の診療所を訪れる患者も年々増加し、その名声は西仏各地に喧伝されていった。

Fauchard がこの成功に甘んじていたら、彼は市井の一名医として終っていただろう。

しかし彼は、鋭い観察力と優れた洞察力をそなえた研究心旺盛な臨床医であった。臨床的な事実関係を追及し検証することに、限らない喜びを感じていた。彼は多忙な診療のかたわら、遭遇した珍しい症例や困難な症例を、折り折りに思いつくままノートに書きとめたのである。

そこには、自ら考案した診療器械や手術の改良法なども記された。彼は自分の仕事を厳しく省察し、つねに診療技術の向上を怠らなかったのだ。

この習慣は、30年近くつづけられたようだ。というのは、1719年にパリで歯肉膿瘍の紹介患者を治療したことが記録されているのだ。これは、彼の勤勉さと医療にたいする情熱を物語っているといえよう。むろん、それは系統的な記述ではないが、この一開業医の診療記録が、のちに、世界で最初の歯科医学書といわれる書物を編纂する貴重な資料となるのである。

ところで、1700年にパリでは *dentiste* に関する条令がつくられた。これは、新規開業者は歯科医試験の審査を経て、免許状を得なければならないという制度であった。アンジェにいた Fauchard は、この試験を受けることはなかった。

たとえパリにいたとしても、今さら認定試験など一顧だにしなかったろう。また彼は、正規の外科医の資格も取得していないので、終生、免許をもたない臨床医で通した。自ら命名した非公認の外科歯科医の肩書を全うしたのである。

実際、ライセンスの有る無しにかかわらず、Fauchard は優れた臨床医として遇されていた。実力だけで通用する時代だったのである。

アンジェでの生活は、20年を越えた。

彼は当地の一流開業医として、満足すべき声望と資産を享受していた。だが、Fauchard はアンジェでは物足りなくなっていたのだ。いつの頃からかは、主都パリに勇躍する日を夢みていた。

その当時パリは、全土から人口が蝟集し、文化

華やかな大都市として栄え、フランスにとどまらずヨーロッパの中心になりつつあった。

当然、医療需要も増加し、腕に自信のある進歩的な医者にとっては、絶好の舞台であった。大都市化にともなって口腔衛生思想が普及し、高度で専門的な歯科医が渴望されていた。

パリの発する学術的な雰囲気、彼のひたむきな学究心を快く刺激し、主都進出を彼の耳に囁きつづけたのであろう。診療記録によれば、彼は少なくとも数回パリを訪れている。往診のかたわら、将来の開業地を物色したのかもしれない。

その頃には、彼の名はパリの医学界にも知られていたはずである。案外、アンジェに埋れるのを惜しんだパリの医者仲間が、主都での開業を勧めたのではなかろうか。そうした誘いに、彼の心は揺れうごいたはずである。

パリで自分の腕を存分にふるいたい——1718年、住みなれたアンジェを離れて、パリに移った。Fauchard 40歳、まさに人生の転機であった。

彼は、パリの繁華街 Comédie Française に診療所をひらいた。大学街に面した一等地であった。22年の臨床経験を有する働き盛りである。彼がパリの花形医となるのには、さして時間を要さなかったようだ。

翌年には、De Jussieu の依頼をうけて、歯肉膿瘍の手術をおこなっている。De Jussieu は、パリ大学医学部の博士、科学アカデミー会員、王立植物園教授をつとめ、当時のパリ医学界の有数の指導者の1人であった。こうした人物の信頼をうけたことが、Fauchard の評判をいやがうえにも高める結果となった。

彼は、パリの医学界に歓迎されたのだ。一部では、彼の開業が心待ちにされていたようにさえ思える。それというのは、國務顧問官の要職にあり、政治家としても名高かった王室侍医の Dodart はじめ、Helvetius, Finot, Hecquet, Winslow, Louis Petit, La Peyronie など一流の医者から、つぎつぎに相談をうけ、患者を委託されているのだ。彼はそれらの要請に十二分に応え、パリの一流外科歯科医として自他ともに認ずる存在となった。

こうした診療を通じてできた交遊関係は、Fauchard の一生の財産となった。のちに彼は、著書出版に際し Dodart 伯爵に献辞を捧げ、20名におよぶ先輩同僚から賛辞を贈られるほどになるのである。

やがて彼は、パリの St. Côme 外科医学校の公開授業に、講師として招かれるようになる。同校には、地元の外科医業組合の会員や地方の外科医から難病患者が送られてきており、歯牙口腔疾患の場合には、Fauchard に助力を求めるというルートが自然にできあがった（こうした関係から、一説には、のちに彼はパリの外科医業組合から特例として、歯科を専門とする師範外科医の称号をうけたと言われる）。

1725年には、同校から歯肉部の重篤な潰瘍性腫瘍を委託され、自分の診療所で数名の外科医の介補をえて手術し、3週間で治癒させたという。

こうして彼の診療活動は広範多岐にわたり、彼のノートにはアンジェ時代に増して貴重な臨床例が記録されていった。

専門書と執筆

Fauchard がいつの頃から、専門書執筆を考えはじめたのか分らない。当時本をつくることじたい稀れであったから、記録ノートは単なる覚え書にすぎず、将来それを編集しようなどという意図はなかったろう。

その雑録を著作に活用するという着想は、どこから生まれたのだろうか。彼は著書序文のなかで、執筆の動機についてふれている。

それによると彼は常々、パリの歯科医試験の試験委員（3名）が外科医であるために、適切な問題がだされぬうえに、志願者にそれをパスするだけの知識を学ばせる教科書が皆無であることに、不満をもっていたようだ。

じじつ、外科学のなかで口腔疾患に関する領域は等閑に付され、外科学書ではお座なりに扱われるにすぎなかった。

一方、歯科医学書の類いは、古く1582年にリヨンでだされた外科医 Urbain Hémarde 著「歯の正統解剖学の調査研究 Recherche de la vraie Ana-

tomie des dents」と、1679年にパリでだされた薬剤師 B. Martin 著「歯に関する論文 Dissertation sur les dents」の2冊だけだった。

Fauchard にいわせれば、前著は古代の文献の焼きなおし、後著は不得要領で、いずれも役にたたない。

そのため彼は、同時代の先輩歯科医たちが、後人のためにすすんで良書を提供してくれることを期待したらしい。そうした仕事には、自分より少し早くパリで開業した有能な歯科医 Carmeline が適任であると考えていたようだ。

Fauchard は、幾多の先達が長年の経験から知りえた知識や技術が、伝承されぬままに失われていくことを惜しみ、そうした貴重な知見が書きのこされれば、後人がそれをさらに発展させることも可能になると説き、それを為さなかったのは先人の怠慢であると断じた。

当時は、自ら考案修得したテクニックは門外不出で、だれもが秘術秘法を売りものにして己れの地位を保全した時代である。Fauchard はそうした牢乎とした閉鎖性を、陋習悪弊であると喝破したのだ。まことに、警醒をうながす勇気ある発言と言わなければならない。

くわえて Fauchard は、活字を媒体とした教育指導の必要性を主張しているのだ。それは彼が、書物の効用を十分に認識していたことを示している。学究的な彼は博覧強記、臨床のかたわら古今の文献を読み漁り、自らの症例と照合し、飽くなき探求心と旺盛な知識欲を充たしていたのだろう。

そうした経験を通して、医育機関のない時代、読書が時間や場所を超えて、多くの人々に反復して独学させうる有用な手段であると、常々感じていたのだろう。活字などには馴染みのうすいこの時代に、書物による啓発と知識の継承を唱えたその先見性に一驚を喫する。

後年、Fauchard 研究家の George Viau（ヴィオー）は、Fauchard は豊かな知識と明晰な頭脳を有した教育の人であると評し、「彼のような人間が広い活動範囲をもたず、彼が著わした専門領域で、多くの学生を指導する手段を持たなかった

ことは残念に思われる。彼は真の教師としての2つの資質、すなわち実践面での勝れた感覚と、表現の明瞭さを最大限にそなえていた。」と記している。

疑いもなく、彼は優れた教育者の資質に恵まれた人物であったのだ。なぜなら、彼は知識の伝承がなされない現状を、憂い嘆くだけではなかった。先人の怠慢を批判したあと、先輩たちが為してくれなかったことを、敢えて自分が引きうけることにしたと、毅然と宣言したのである。

すなわち、彼を慣れない著作に駆りたてたのは、後人にたいする使命感であったのだ。そこには、単に意気込みを越えた気迫がみなぎっている。

そうした Fauchard の急進的な行動には、古典主義が一斉に開花した文化の黄金期という時代的背景、それもパリというリベラルな活力ある環境が、色濃く反映していたといえよう。

こうして、彼はその決意を実行に移したのだ。

Fauchard がいつ頃から執筆をはじめたのか、明らかではないが、再版第Ⅱ巻のなかで彼は、初版の原稿は1723年には印刷できる状態になっていた旨記しているので、同年に脱稿したと解してよいだろう。

初版の原文原稿は現在、パリ大学医学部図書館に保存されている。この生原稿は、四つ折判の裏表にビッシリと書かれた全文844頁におよぶ膨大な束である。

これだけの量を、長年にわたる雑多な診療記録を整理しながら、多忙な診療の合間合間に書き綴ったのであるから、少なくとも数年はかかったことであろう。

パリ移住1、2年は開業を軌道にのせるのに精一杯であったろうから、多少ゆとりのでてきた頃、1720年前後に起稿した、と推定してもムリはないのではなかろうか。

つぎに、Fauchard はどのような構想のもとに筆をとったのか。序文にのべられた執筆動機から推して、当初から外科歯科医、歯科医、歯科志望者向けの教科書の類いを意図していたようだ。それも通り一遍の理論にとどまらず、歯牙口腔疾患

の治療法を具体的に記述し、実地臨床に役立つ歯科医術の実技書をめざしたのである。

それに、学説やテクニックは、学界で承認されたもの、Fauchard 自身が経験して確認したものに厳選したうえ、読む者が十分に理解できるように、平易で明快に解説するべく心がけたという。

当時、原稿作成の際には書記に代写させるのが普通だった。医学用語の多い専門的な内容であったから、書記は Fauchard の下書き原稿を清書したのであろう。

Fauchard は15歳のときには海軍で働いていたわけであるから、初等の教育しか受けていなかったはずである。知識人といえども、拙ない文章作法しか持ちあわせていなかった時代である。書記は代写しながら、誤字当て字や文法の謬りなど、彼の国語力の不足不備を補ったことは想像にかたくない。

De Vaux と賛辞

そうしてできあがった草稿を、Fauchard は入念にチェックしたに違いない。そのうえで彼はそれを、Jean De Vaux (ド・ボー) にみせて校閲を仰いだのである。

De Vaux は当時、パリの外科医業組合の宣誓加入の外科医(誓約外科医)で、同組合の前会長をつとめた令名高い人物であった。彼は該博な学識にくわえて文筆の才に秀で、「自分自身の医師 Le Médecin de soi-même」(1682年)、「ヒポクラテス格言集 Les aphorisme & d'Hippocrates」(1727年)等、数多くの著作をあらわした。

平素から懇意の仲だったこの尊敬する大先輩に、Fauchard はすすんで助言を求めたのであろう。彼は、自らの分限を知り、己れの足らざる所を補うために、他に教えを乞うをいとわぬ熱意と謙虚さを兼ねそなえていたのだ。

De Vaux は1649年生まれであったから、その頃には70歳を越えていたが、有能な後輩の依頼に快く応じたのだらう。案外、Fauchard に歯科医学書の執筆を勧めたのは、De Vaux ではなかったらうか。そのとき彼は Fauchard に、協力を惜しまぬからと、温かく励ましたような気がする。

それに勇気づけられて、Fauchard は、だれも手をつけなかった困難な仕事に取りくむ決心をしたのではないだろうか。

いずれにせよ、De Vaux は Fauchard にとって最良の理解者であり、彼の著述をだれよりも適切にアドバイスできる立場にあったことは間違いない。

ところで、De Vaux は当時、依頼をうけて各種の医学書の添削にあたっていた。B. Saviard の外科臨床記録集（1702 年）、La Motte の助産書（1715 年）、同じく外科学書（1723 年）、Dionis の解剖学書の改訂（1729 年）等。とくに彼は、先学の業績から要点を抜萃して、それを再構成する才に長けていたという。書物出版にも通暁していたはずであるから、上梓についても遠慮ない助言をあたえていたことだろう。

彼は、医学書の校閲者・編纂者として衆目の認める存在だったのである。当時、好むと好まざるとにかかわらず、大家 De Vaux に校閲を仰ぐのが不文律となっていたのかもしれない。多少はあれ、彼はすべての医学書の執筆出版に、容喙（口出し）していたのではなかろうか。

したがって、Fauchard が De Vaux の助けを借りたからとて、別に不思議はないのである。それは、決して彼の功績を貶めることにはならない。

Fauchard は、De Vaux の助言に喜んで適従したはずである。De Vaux は、専門の外科的な部分に筆をいれたといわれる。添削は、歯科技術などを取扱っている第Ⅱ巻より第Ⅰ巻に多く、それも臨床症例に限られていたようだ。

Fauchard はそうした加筆修正の個所を検討し、納得いくまで内容の補正均整を期したろう。そのために、多少上梓の時期が遅れたかもしれない。

この De Vaux の助力は、出版前から衆知の事実であったはずであるし、Fauchard もそれを隠そうとはしなかったろう。このことが、のちに Fauchard の著作に疑惑をあたえる因となり、彼をめぐる評価に要らざる影を投げかけることになるのである。

だが、De Vaux は Fauchard の初版に、つぎ

のような賛辞を寄せているのだ。それは、他の賛辞より 1 年数カ月早い日付になっており、2 人が格別の関係にあったことをうかがわせる。

『外科歯科医の Fauchard 氏が書いた歯の構造、歯の疾病およびこれらの疾病を治療するための方法に関する充分な論説を取扱った原稿を読んで、私は、この論説が非常に理路整然とし、知識および明瞭さで書かれていることを理解した。

私にはこの原稿が、この特別な外科医学領域を自己の大切な任務にしようと、自分に言いかけられている人々にとっては、非常に学ぶべきことの多いものであるように思われる。

実際臨床上に現われた困難、奇妙、そして不可解ないくつかの症例に関して、彼が加えている考察、どのような状況のなかでも、口腔疾患の治療をするのに適した各種の器械の正確な説明、これらの器具をより便利に、かつ効果的にするために、昔の器械に加えてきた改良や変更、またその他の巧妙に作製されたいくつかの器械の発明は、この著書をして解剖学または外科学の教科において、あるいは抜粋された小論文のなかにおいて、いままで表面的にしか取扱われてこなかったこの種のすべての書物を凌駕するものになっている。

結論的には、それを必要とする各方面の人々にたいして、興味を引きおこすであろう一連の記録は、概論のより感動的な考え方を示すのに役立つであろうし、この概論を実行するのに役立つであろう。また私は、この論説が各種の外科医のみならず、歯科医学の助けを必要としている患者にとっても、非常に有益なものであることを確信するものである。

一言にして表現すれば、つぎのように考えられるであろう。すなわち、一般庶民が著名な外科医の恩恵に浴し、外科学や解剖学の優れた教科を受けられるのに加えて、外科学の一分野のみに献身している個人が、自分たちの分野で自らの手で達成した成果を惜しむことなく、喜んでこれを公表しようとしているのであり、このわれわれの時代を祝福するのは当然のことである。なぜならば、これこそこの有用な技術を完全なものにする手段だからである。』

このように De Vaux は、他の2倍の長さを費して、Fauchard の著書をくりかえし口を極めて称讃している。それは、お義理の紋切型賛辞に非ず、過褒ともいえる懇情あふれる推賞文である。

ここに記されている言葉は、額面どおり受けてよいだろう。そこには、同書執筆に自らが関わったことなど片言隻句もでてこない。一読すれば、De Vaux の立場は瞭然としている。彼は、あくまで陰の助力者の域をでず、必然、同書は Fauchard の独創と努力によって書かれた、紛れもない Fauchard の著作物であることが判る。

実際、De Vaux は、監修者にも共著者にもなっていないのである。われわれは、その事実をそのまま受けとめればよいのだ。もし彼が助力者以上の役割をはたしていたのであれば、このような讚美に終始した文章を寄せるはずがない。

それに、校閲を仰いだほどの間柄にもかかわらず、Fauchard は彼の賛辞を特別扱いしていないのである。De Vaux と相談のうえでのことかもしれないが、もし助力者以上の働きがあれば、他の賛辞者並みの遇し方では収まらなかっただろう。

畢竟、Fauchard 死後に囁かれることになる疑惑は、まったく愚かしい誤解であったと言わざるをえない。

脱稿と賛辞

さて、De Vaux が賛辞を呈した日付は、1724年3月19日となっている。彼は校閲を終えてから賛辞を記した、と考えるのが自然であろう。そうすると、脱稿の時期は、1724年の初めであったと思われる。

Fauchard は再版の第Ⅱ巻26章の冒頭で、「1723年には私の書物を印刷する準備ができていた。けれども私の職業が絶えまなく私に仕事をあたえたために、1728年まで発行を妨げられた。」と、発刊が遅れた理由を弁解している。

けれども、この説明には、どうも胡乱臭さを感じずにはいられない。印刷する準備ができていたというのは、印刷所へ入稿できる状態、もしくは刷りに入れる状態と解せられる。執筆期間からみ

ておそらく前者であろうが、いずれにせよ、それから出来上がりまで5年も要したというのは、いかにも不自然である。

というのは、彼がパリの花形医としていかに多忙を極める身であろうと、入稿してしまえば、あとは校正以外は印刷所の作業になるのだから一。

高山は、著書を分析して、1723年までに書かれたのは33章で、第Ⅰ巻の28・35・36・37の4章は、Fauchard のいう1723年より後に書き足されたと指摘し、原稿の完成ははやくても1724年の暮れか、1725年になってからである、と論証している²⁶⁾。

たしかに、脱稿後もなお不安不満がのこり、狐疑逡巡、印刷所への出稿をためらい、さらに三思熟考、完璧を期して執拗に推敲をつづけたであろうことは、容易に察せられる。

発行が遅れたのには、もう1つ理由があったと考えたい。

Fauchard は脱稿してから、賛辞執筆の依頼をはじめたものと思われる。著書に載せられた賛辞は、De Vaux のものをふくめて13通（うち連名のものが3通あるので、賛辞者は20名となる）、De Vaux の賛辞以外は、いずれもその日付は1725年夏以降なのである。

この Approbation（賛辞）というのは、書簡体で記された著書の推薦文である。当時は、本を出版する際には、同業の識者の賛辞を飾るのが慣例だった。彼らのネームバリューと誉め言葉で、権威づけを図ったのである。それによって、著書著者にたいする非難や誹謗を封じこめよう、という底意があったことも否定できない。

内容に自信はあったとはいえ、最初の本格的な歯科医学書を世に問うだけに、Fauchard は医学界の権威筋の賛同を求めるべく腐心したはずである。彼はパリ市内をまわって、原稿をみせて出版構想を説き、賛同の証しとして12通の書簡をもらいあつめたのだろう。依頼したのは12通だけだったのであろうか、賛辞を寄せなかった者もあったかもしれない。

ともあれ、20名の賛辞者の錚々たる顔ぶれは、Fauchard の華やかな交遊関係を誇示している。

当時としては、パリ医学界最高級のメンバーをそろえたと言ってよいだろう。診療を通じて信頼関係にあった De Jussieu, Helvetius, Finot, Hacquet, Winslow は皆、名をつらねている。

14頁にわたるこの賛辞は、パリ大学医学部の博士、王立科学アカデミー会員である Winslow に始まり、前半にパリ大学医学部の博士、後半にパリの開業外科医を配し、カトリック教皇とフィリップ五世の侍医である外科歯科医 Laudumiey に終わる。

配列にはとくに序列はなく、また書簡を記した日付順でもない。そこで、これを日付を追って並べかえてみよう。

1724年 3 月29日	De Vaux	(医学部博士)
1725年 7 月17日	Hecquet	(医学部博士)
1725年 7 月19日	Helvetius	(医学部博士)
1725年 7 月24日	Silva	(医学部博士)
1725年 7 月26日	De Jussieu	(医学部博士)
1726年 1 月15日	Finot	(医学部博士)
1727年12月 8 日	Winslow	(医学部博士)
1728年 5 月21日	Tartanson	(開業外科医)
1728年 5 月26日	Duplessis	(開業外科医)
1728年 6 月 1 日		
	Sauré と De Gramond	(開業外科医)
1728年 6 月 7 日		
	Bourgeois 他 5 名	(開業外科医)
1728年 6 月 9 日		
	Laudumiey	(開業外科歯科医)
1728年 6 月11日		
	Verdier と Morand	(開業外科医)

ここに、賛辞をめぐる経緯が浮かびあがってくる。De Vaux を別にして、1725年期のパリ大学医学部博士関係と、1728年期の開業外科医関係に区分できる。前者の4通は7月中旬から下旬に集中し、後者の6通は5月下旬から6月上旬にあつまっている。両者には3年ほどのブランクがあり、この間、1726年1月と1727年12月に各1通が寄せられているのだ。

これをみると、Fauchard は1725年初めに全員に一どきに依頼したのではなく、まず医学部博士関係にたのみ、開業外科医組には、出版間際にな

ってあわただしく声をかけたことが推測できる。

医学部博士関係のうち親交の深かった Finot, Winslow だけを、あとから追加依頼したとは思えない。当初依頼したが、なんらかの事情で寄稿が遅れたのではなかろうか。2人は念入りに原稿に目を通したのか、ズボラを極めこんだのか。

ともあれ、Winslow の賛辞は、つぎのような内容であった。

Winslow と出版

『私は国璽尚書殿下の命により、Fuachard 氏による「外科歯科医もしくは歯の概論」およびその他と題した原稿を読んだ。』

すでに数年前に、この著者には外科学の分野に関する知識、能力、観察力の偉大な基盤があることに気づき、私は直接彼にこの論文を発表するように勧めた。このような背景のなかで、彼はこの著書を公けにした。

私は、彼がこの著書のなかに記載した内容が優れており、かつこの印象を妨げるような如何なるものも記載されていないと考えている。

私は単に、つぎのことを忠告するにとどめた。すなわち、ここで述べられているいくつかの良い治療法の応用は、個々の状況のなかでは習熟するかわりに害してしまうことのないようにするために、真の専門家として疾患を正しく見極めることが必要である。』

斯く Winslow は一応、優れた内容と評価しているものの、賛辞にしてはいささか素っ気ない。忠告のくんだりなど辛口すぎて、融通のきかない気位が高い人物像が浮かぶ。

それはさておき、これまで指摘されなかった新しい事実に注目したい。文中、Winslow は、数年前に直接 Fauchard にこの論文を発表するように勧めた、と明記していることだ。

出版の勧めとはいえ、De Vaux でさえふれなかった Fauchard 著作への関わりを、ズバリ暴露しているのだ。Fauchard はそれに従って同書を公けにした、とまで言い切っている。出版を前提にして原稿をみせたのであろうから、いかにも過言なのだが、その直截な表現は、彼が著者にたい

し相当の影響力を行使していたことをうかがわせる。

ここで注意すべきは、“数年前”という時期である。それは、賛辞を記した1727年12月からみて1724年か1723年になる。すなわち、Winslowはすでにこの頃、原稿をみていたわけである。De Vauxの賛辞が1724年3月であるから、FauchardがWinslowにみせたのは、De Vauxのすぐあとか、あるいは同時期ということになる。

そうすると、Winslowははたしてどのような形で同書に関わったのか。単に賛辞を書くために原稿に目を通したのか、それともそれ以上の関与、すなわち、De Vauxと同様に、同書の内容におよぶアドバイスをしたのか。

賛辞をみると、“国王の命”により原稿を読んだとある。すなわち、彼は国王が書物の出版許可をあたえる際に、その命令を受けて原稿を検閲する立場にあったのだ。

そこでFauchardは、医学書担当の検閲官Winslowに、前もって（数年前）草稿の段階でお伺いをたて、内々に承諾をえたのであろう。そのうえで、本稿ができあがった段階で国王へ出版許可を仰いだと考えられる。

その検閲命令が既定どおりWinslowに下ったのだ。そこで彼は今度は、なにくわぬ顔で公式に本稿に目を通したというわけである。当時、事前に検閲官の了解をとっておくのが常道だったのだろう。

思うに、Winslowは国王の威光を背にして、お伺いをたてにきたFauchardに鷹揚に内諾をあたえたに違いない。そして彼はその内諾を、賛辞では発表を勧めたと、自らの立場を誇示するような表現に巧みに摩りかえたのであろう。

こうしてみると、FauchardがWinslowの賛辞を筆頭においた理由もうなづける。Winslowは、単なる賛辞寄稿者ではなかったのである。

そうすると、Fauchardが彼に賛辞を依頼したのは、他の医学部博士関係者と一緒ではなく、検閲を受けてからと考えるのが妥当となる。つまり、検閲という公的手続きをおえたのち、たぶん、11月下旬から12月初旬に、晴れて賛辞を懇請

した。それをうけてWinslowは、すぐに12月8日付の短い書簡をしたためたものと思われる。

ただ、Winslowがいつ国王の命令を受けたのか、そして原稿を検閲するのにどれほどかかったのか。おそらく、数カ月、いや半年、1年ぐらいたったかもしれない。それは検閲者の意向次第であったろうから、著者としては督促もならず、焦りを抑えながらただひたすら待つだけだったのだろう。

見方によっては、Fauchardが医学部博士関係に賛辞をもらったのは1725年の7月であるから、その時点ですでに国王に出版許可を願いでて、本稿は検閲にまわっていた、と考えられないこともない。そうするとFauchardは、Winslowに2年半も待たされたことになる。

その真偽は永遠の闇の中であるが、いずれにせよ、検閲のために上梓がとどこおったとみることはムリがない。

かくして、検閲官WinslowがOKをだして、その旨を国王に上申し、賛辞を記した同じ12月の26日に、フランス国王から出版許可文が下りた。

翌1728年2月12日付で発行者のJean Marietteと著作権に関する取りきめをし、彼の新著は同月20日付にてBrunetパリ市長名で、パリ王立書籍発行印刷業会議所の登録簿に登録され、公的な手続きを終えた。

したがって、1728年2月下旬には上梓できる状態になっていたのである。ところが、彼はそれから後に、開業外科医組に賛辞を依頼したようだ。

当初は、開業外科医たちに依頼するつもりはなかったらしい。ところが、いよいよ出版間近の4、5月頃になって、医学部博士関係に限った片寄りを、外科医仲間から指摘されたのではなかろうか。そこで急拠、掻きあつめたというような気がしてならない。

彼らの賛辞6通のうち3通が連名で、計13人が賑やかに名を連ねており、友人同僚の気安さを感じさせる。いずれも、医学部博士連の固苦しい賛辞とちがって、同僚の快挙をよろこぶ友情あふれる祝辞といった趣きがある。

さて、こうした事情がかさなって、心ならずも

延び延びとなり、結局、出版は当初の予定より3年～3年半遅れてしまったものと思われる。ともあれ、1728年6月11日付 Verdier, Morand 連名の最終の賛辞をうけとってから、いよいよ印刷に入ったのである。

正確な発行日はわからない。著書の扉にローマ数字の発行年があるのみで、当時の出版の慣習なのだろう、月日はどこにも記されていない。

初版は、洋紙12折判の duodecimo の手頃な判型であるが、第Ⅰ巻は534頁、第Ⅱ巻378頁で、通巻912頁におよぶページ数である。当時の活版印刷技術からして、上梓までには少なくとも半年はかかったろう。したがって発行は、1728年の末頃になったはずである。刷りあがりは、翌年にずれこんでいたかもしれない。

パリ進出から10年、Fauchard 50歳の年であった。

初版と独国

初版の印刷部数は、当時の出版事情から推して、500部ていど、多くても1,000部は越えなかったろう。装丁は粗目の手漉き紙に刷られた刷り物を、折りたたんだまま紙表紙にくるんだ、いわゆるフランス装といわれる仮綴じ本であった。

書題は、「Le chirurgien dentiste, ou traité des dents」¹⁾。彼は自らの肩書を、そのまま書名の主題に用いたのである。それは、外科歯科医の存在を顕示し、彼の担当する診療領域とその内容を直截に認識させるべく意図したことは言うまでもない。

賛辞のなかで、De Vaux は著者を“外科歯科医 Fauchard 氏”とよび、また Laudumiey も外科歯科医の肩書を使用しており、この頃には一般的にも通用する名称になっていたことをうかがわせる。とはいえ、まだ十分には周知されていなかったのだろう。その徹底を期して、Fauchard はここでも彼らしい独創と大胆さを遺憾なく発揮したのである。こうして、外科歯科医の名称は、一般用語として定着していくことになる。

序文で彼は、決して個人の栄誉を追うに非ず、世人の医療福祉に尽さんがためであると、くりか

えし強調している。数々の賛辞で予防線は張り巡らしたものの、やはりさまざまな批判誹謗の声を覚悟していたようだ。言わずもがな、本書は歯科医学を学ぼうとする者のために著述した旨、その対象を殊更に限定して、同書の存在意義を堅守しようとしている。

本文は、第Ⅰ巻456頁、第Ⅱ巻346頁の紙幅を費し、各頁は天地29行、左右は36～39字詰めで、オールスタイルの欧文活字を用いた読みやすい組みになっている。

本文内容は、第Ⅰ巻が37章、第Ⅱ巻24章より構成され、計61章は第1部と第2部に大別できる。

まず第1部は、歯牙の構造や機能等を概説したあと、歯牙口腔に生ずる疾患100種類ほどを3グループに類別し、逐一その治療法と予防法を詳説している。

つぎに第2部では、各種の手術法について解説し、とりわけ著者自身が考案開発した歯科用器械器具とその使用法を詳述し、さらに自ら経験した特異な症例72ケースを提示している。

文中、理解を得やすいように、器械器具等を写生した計40枚の版画が挿入されている。その線画によるシンプルな図形には、彼の発想の豊かさ、大胆さ、観察の鋭さ、慎重さ、テクニックの繊細さ、器用さが描きだされているようだ。

各頁に著者の情熱と博識が充溢し、随所に彼の独創と個性が光っているが、全編をつうじてその卓抜した特色をあげれば、つぎの5点に要約できよう。

第1は、当時の歯科医術の最先端を中心に、基礎医学から関連医学、医用材料におよぶ広範な領域を包含していること。

第2には、各疾患ごとに症状から治療予防法まで、即臨床に役立つ具体的事項を的確かつ平易に解説していること。

第3は、歯牙口腔疾患と全身疾患との関連性を説いて、それを立証する数多くの症例を提示していること。

第4は、口腔衛生の必要性を説いて、口腔衛生思想の啓蒙普及を強調し、歯牙口腔疾患の予防を提唱していること。

第5には、自ら考案開発した器械器具や手術法の創見を、惜しむことなく具体的に披露していること。

なかでも、18世紀初期にすでに、歯牙口腔疾患が全身の健康に重要かつ密接な関係がある事実を認識していたこと、および口腔衛生の必要性と予防の有用性を唱導したことには驚かされる。

さて、初版の評判は正確なところわからない。Fauchard がのちにだした再版の序文で、「初版は早々に出尽してしまった」と記しているので、歓迎されたことは間違いないようだ。

それにしても、秘術秘法として固守すべき開業医の手の内をさらけだした行為は、当時の関係者にとって確かに衝撃的であったろう。蛮勇と呆れ、愚拳と贅める者も少なくなかったろう。

つぎに彼らが驚かされたのは、その内容であった。近世初期の歯科医学常識をベースに、自らの治験を折りこんだ的確な解説に目を見張った。なかでも、全編をいろどる豊富な実証例と鋭い臨床眼は、外科医はじめ医学関係者を驚嘆させたい。それはまさに、科学的で系統だった第一級の専門書であった。とにかく同書は、200年後の識者をして、彼のおこなった歯科医術は今日の原則とまったく変わりがない、と賛嘆せしめたほどの内容だったのである。

それは、これまで歯科医術を香具師の職分とみなしがちだった関係者に、鮮烈なイムパクトをあたえ、外科歯科医や歯科医への見方を改めさせる切っかけをつくったといわれる。

ところで、同書の口絵には、J. Le Bel が画いて、当時高名な彫刻家だった J.B. Scotin が彫った著者の肖像が飾られている。

その肖像画は、時のルイ十四世が愛用したアンジュという、背肩まで豊かにたれた巻き髪の男性用鬘（かつら）をつけ、正装に威儀をただし、左向きのポーズで、右手に書物をささえ左手で宙を指している。

後年、Viau は、「Fauchard の肖像画は、彼の品格と威厳を描きだしている。高い額、やや曲っている長く細い鼻、輪郭のハッキリした口と唇は、彼の繊細さと優しさをあらわしており、目は

大きく物寂しげだが卒直なまなざしをしている。彼の全身の容姿からは、当時では最高の上品なフランス人の礼儀正しさが印象づけられる。全体の感じから彼は思慮ぶかく、愛敬のある、誠実な男であることがうかがえる。」とベタ褒めしている。

Viau の熱烈な崇拜ぶりが躍如としているが、これはいささか褒めすぎとしても、その貴族を想わせる優雅な装いと、日本人好みではないが医学者然とした風采は、フランス人には殊のほか好評で、外科歯科医のイメージを一挙に高からしめたという。

初版本は人手をへて隣国ドイツへも流れたのだろう。発刊から6、7年後の1730年代中頃に、同書はドイツ語に翻訳され、「Pierre Fauchard 氏のフランスの歯科医、もしくは歯に関する論文 Des Herrn Pierre Fauchard Frantzösischer Zahn = Artzt oder Tractat Von den Zähnen」と題して出版された⁶⁾。

この翻訳版は、時のプロシヤ国王フリードリッヒ一世の侍医だった Augustini Buddei の序文が麗々しくつけられているが、訳者、発行者、発行場所、発行年月はいずれも明らかでない。

Buddei は序文のなかで、原著が有用な専門書であると認めながらも、内容を盲目的に信じないようにと辛辣な調子で戒め、自らも訳出に関与したにもかかわらず、手離しの推奨はしていない。端なくも、フランス人 Fauchard にたいする屈折した感情をのぞかせているようだ。

ともあれ、同版は原著と同時代にだされた唯一の訳本であった。Fauchard はこの訳本をみたのだろう。再版の序文で「外国語に翻訳する価値があると考えられた」と婉曲にふれており、原本が評価された証左として、ひそかに鼻を高くしていた節がある。

ところで、翻訳版にも Fauchard の口絵が掲げられている。それは、G.T. Busch が原画の裏刷りを模して彫刻したもので、右向きのポーズになっている。フランスで好評だったこの肖像画が、ドイツでは反対に、王侯貴族を気取った学者らしからぬキザな奴、とはなはだ不評だったらしい。

Buddei の言いまわしは是としても、肖像画に

ケチをつけるなんぞは、どうもドイツ人のナショナリズム的臭いを感じさせる。民族性の相違というより、そこにはフランスに先を越された口惜しさ、負け惜しみが露呈している。

それというのも、当時ドイツではまだ、自製の歯科医学書は1冊もだされていなかったのだ。それだけに Fauchard 本の出現は、ショッキングな出来事だったのだろう。それが評価に値するものであればあるほど、否定もならず無視もできず、鬱屈した思いを呑みこまざろうえなかった……。こうしたドイツ人の反感がねづよく尾をひいて、はるか後年、Fauchard の存続を脅かすことになる。

再版と第3版

それから18年後の1746年に、再版（第2版）が発刊された²⁾。このとき Fauchard は、68歳になっていた。

その序文で彼は、読者が初版と同様の好誼と敬意をもって迎えてくれることを、心ひそかに期待している旨記し、自信と余裕のほどをみせている。

初版と同じく2巻より成るが、通巻して編集上の構成に異同がみられる。

賛辞は、同じ顔ぶれ同じ配列で、最初の Winslow 以外は前版のものをそのまま掲載している。彼の1通だけは、再版用として1746年3月2日付で新たに書かれているのだ。

初版の賛辞者のなかには死亡した者も少なくなかったろうし、Fauchard にとってはもはや、麗々しい賛辞で箔をつける必要はなかったといえよう。ただし、Winslow だけは例外であった。王立植物園の解剖学兼外科学教授の肩書をくわえた彼は、今回も検閲の任にあたっていたのだ。

時代がかわって大法官の命令により、彼は、再版の補筆された部分を重点に目を通した。そこで Fauchard としては、ふたたび賛辞を乞わぬわけにはいかなかったのだろう。

大御所 Winslow は、再版をつぎのように推した。

『私は大法官殿下の命令により、Fauchard 氏に

よる「外科歯科医もしくは歯の概論」と重要な追加と題した書物を調べた。

これらの追加のなかで、私はいくつかの非常に学ぶべきことの多い考察と、非常に利点のある新発明を見出すことができた。そのため私は、1728年の出版に際しておこなった評価を、全体的に繰りかえし述べることにしたいと思う。』

書物とあるのは、初版本に赤字を入れたものを提出したからだろう。前回同様贅言を費さず、追加部分を検討したという事実だけを簡略に記した文面で、後半は自分が発表を勧めたという内輪話以降の文章をそっくりつなげている。18年前の寸評をくりかえす芸のなさを察するに、老齢になっていた Winslow にとっては、賛辞の寄稿は気のすすまぬお付き合いであったのだろう。

つぎに本文は、第Ⅰ巻は初版より1章ふえて38章、第Ⅱ巻は2章ふえて26章、通巻すると61章から64章になっている。頁数はおのおの38頁と23頁ふえて、総頁は第Ⅰ巻494頁、第Ⅱ巻369頁。

Fauchard は序文で、数多くの特異で有益な症例と初版以降の新しい研究成果を追加した、とその充実ぶりを自負している。

けれども高山によれば、再版で追加された章はⅠ巻の2章・10章、Ⅱ巻の24・25章の4章で、このうちⅠ巻2章は初版Ⅰ巻15章の書き改めであり、またⅠ巻17章は初版Ⅰ巻15章の一部と16章から成っている。さらに彼は、1行以上の書き足しは100カ所以上におよぶが、1頁以上はわずか13カ所であり、その結果、新しい章による増頁は約36頁半で、残り約27頁分は細かな書き足しに由ると分析している²⁵⁾。

目新しい内容としては、Ⅰ巻10章の髄腔穿孔法の術式、22章の歯槽膿漏症に関する解説である。この再版は、歯槽膿漏症について世界で最初に記述した歯科医学書として知られており、これによって、のちに同症は彼の名を冠して Fauchard 病と称されるようになる。

その他、症例報告の追加は1例のみで、版画も終りの33、34枚目の2頁を追加したにとどまっている。

これをみると、全編にわたって見直しをしては

いるが、18年の充電期間をかけたにしては、彼の自費するほど改稿されたとはいいいがたい。大幅な改訂版というより、むしろ増補版といったほうがよいだろう。

Fauchard が増訂補訂の作業をいつ頃からはじめたか分からないが、本格的にとりかかったのは60代後半に入ってからだろう。すでに彼は、功なり名逐げ、初版執筆時の圧倒的な野心も気力もなかったのだろう。

なお、初版の助力者だった De Vaux は、同版が出版された翌年の1729年に没しているのです。再版編集には関与していない。

それにしても、この種の専門書の再版がだされるのは、当時異例に属することだったろう。それは、Fauchard が時代に抜きでた存在であったことを証明しているといえよう。彼の再版を同時代人は、どのように捉えたのであろうか。

1746年、パリの外科歯科医 Bunon は、自論「Salpêtrière 病院及び St. Côme の王立外科学アカデミーで行われた実験と実技説明」の前説の第3章を Fauchard 著書の解説に割いて、彼は偉大な外科医であると激賞した。さらに同じく外科歯科医 Lecluse (1754年)、Bourdet (1768年) らも彼の功績を絶賛しているところを見ると、生前、Fauchard の評価は定まっていたようだ。

かくして彼は、1747年以降パリの中心 Grand Cordeliers 街に住み、パリ郊外にある Grand Mesnil とよぶ豪壮な城館を別邸とし、晩年悠々自適に過ごし、1761年3月22日83歳で死去した。

Fauchard の死後11年、1772年にパリの外科医 Pierre Sue が、偉人 Jean De Vaux の伝記をまとめた。その「De Vaux 氏の生涯と業績に関する史的概説 Précis historique sur la vie et les ouvrages des M. De Vaux」のなかで、De Vaux と Fauchard との関係に最初にふれた。

彼は「彼らはなんらかの理由があって、Fauchard 氏による仕事のなかで、De Vaux 氏が大きな部分を分担したように見せかけた。」と、遠まわしな表現で記している。これは、De Vaux 側から Fauchard 著書に言及したものだが、De Vaux の関与は見掛けほどではないという意味に

解される。

見せかけの協力となると、その含意は Fauchard が自著の権威づけに De Vaux の名前を利用したと受けとれるが、これはいささか De Vaux サイドに偏した見方である。というのは、この見解にはたしかな論拠があるわけではなく、あくまで後人 Sue の推量の域をでていないからである。

さて、Fauchard 没後四半世紀、1786年に第3版が重版された³⁾。再版からかぞえて40年後になる。

同版には、むろん Fauchard の意思は反映していない。全体の構成には異同があるが、本文内容は再版そのままリプリントされている。

亡き先人の医学書が25年もあとに再出版されるなど、稀有なことであつたろう。それは、同書が好個の歯科医学書として、それだけ求められていたことを如実に物語っている。Fauchard の前に Fauchard なく、Fauchard のあとに Fauchard なし、というところか。

忘却と曲解

それから3年後、フランス全土をゆるがした革命が勃発、パリは混乱の坩堝(るつぼ)と化した。不幸なことに、このときに Fauchard に関する諸々の資料が消失してしまったといわれる。その後 Fauchard の名前は、歴史の波に吞まれたようにフランス医学史上から、忽然と消え去ってしまったのである。それは、後世評されるように、まったく“不可解な忘却”というほかなかった。

ところが、ドイツでは Fauchard は忘れさられていなかった。世紀がかわった1803年、唐突に、しかも不幸なかたちで彼の名が想起されることになる。

それは問題の人物、ベルリンの歯科医 John J. Serre (セレ) によってもたらされた。

当時、学識豊かな医学者として知られた彼は、同年「臨床歯科薬理学 Praktische Darstellung der Zahnarzeneikunst」を著わした。そのなかで、Fauchard は同書の著者ではなく、パリにいた友人の外科医である De Vaux がこれを著述し、Fauchard は観察の部分を共作しただけに相違ない、と露骨

に誹謗したのである。

しかし、1759年生まれのドイツ人である Serre が、それを論証する資料をもっていたわけではない。彼は、同書の独訳本を読んだにすぎず、その読後感が、Fauchard への拭いがたい疑惑と臆測を生んだのであろう。それが、往時の民族的反感をよびまし、彼をして曲解という意図的な中傷に走らせたのではないか。

いや、学者らしからぬ厭がらせとみるのは酷とすれば、彼は同書が75年も前に一開業歯科医の手によって書かれたものとは、到底信じられなかったのだろう。それは、反感や妬みに先行した素朴な疑問だったのかもしれない。

それだけ Fauchard の活動は、傑出していたといえるだろう。彼の登場は、史上はるか後人の理解を越えるほど早過ぎたのかもしれない。その意味から、こうした誤解に発する批判の飛礫（つぶて）を浴びるのは、パイオニアの宿命といえようか。

本来、史実の立会人でも同時代人でもない Serre 発言は、一笑に付されるべきものであった。けれども、彼と共通した思いを抱いていた者が少なかつたのか、医学者 Serre への信頼ゆえか、ドイツ国内では信憑性をもって受けとめられたようだ。

皮肉にもこの誤った共感が、フランスでは埋もれてしまった Fauchard の名を、実作者に非ざる不名誉な人物として近国関係者の脳裡に記憶させる結果となり、この首肯しがたい臆説が、そのうち長く Fauchard 像に影を落とすのである。

こうして、Fauchard は忘却と曲解という暗い波間に漂いながら、歴史の沖合をさまよいつづけた。

だが、Fauchard 像を形づくる資料は失せても、彼の3版の著書は残っていた。この著書こそ、いついかなるときも Fauchard の活動のすべてを歴然と顕在させていた。それは、忘却という冷厳な時間的試練に耐え、曲解という歴史の悪戯を糺させることになる。

まさしく、フランスの後人は、自国の先駆者の遺した記録を朽ちさせはしなかった。歴史の彼方

に没しかけた Fauchard を遡及し、最初に手を差しのべたのは Audibrant であった。1821年、彼はつぎのように先人の著書を評した。

「Fauchard の著書は、今日でも歯科医学領域では最高のものであり、これらの著述は素晴らしい歯科医たちを生みだしてきた。かつて、内科学および外科学に関連する医学の教えを、より明確に述べより確実に表現することは不可能であった。このような観点から、Fauchard の後にどのような進歩がなされたとしても、彼の著書に匹敵するものはないであろう。」

初版執筆より100年後の識者が、“今日でも最高の歯科医学書”と、最大級の表現で礼賛したのである。Fauchard は辛くも、忘却の淵にとどまった。

さらに、1843年には Désirabode が、現在でも通用する彼の業績を絶賛して、医学関係者に Fauchard の名前を想起させた。

ついで1845年、Trousseau は自著「歯科医学の全最新要論 Complete New Elements of the Science of Dentistry」で、“歯科外科学の父であり創始者である”と、惜しみなく称讃して歴史的評価をあたえ、1863年になって医学雑誌「l'Abeille」に Fauchard の略伝を発表した。

関係者はようやく、自国の先人 Fauchard を歯科医学の鼻祖として見直しはじめた。彼は、歴史の彼方から呼びもどされたのである。

1880年11月13日、フランスで最初の歯科医育機関であるパリ歯科医学校が開校された。その開校式において Louis Thomas は、歯科医学の歴史に関する演説をおこない、つぎのように自らの所感を披瀝した。

「私は Pierre Fauchard について話をしてきましたが、諸君、どうかこの名前をよくご記憶ねがいたい。なぜなら、諸君の専門的職業の歴史における新しい時代は、彼とともに始まったからである。」

フランスの歯科界にとって記念すべき日、斯界関係者を前に彼は、Fauchard を歯科医学に一新紀元を劃した先駆者として評価したのである。

かくして100年ののち、Fauchard は歴史の闇の

中から蹠踉と姿をあらわした。

やがて、フランスでの Fauchard の復活が伝わっていったのであろう。1896年になってドイツの Geist Jacobi が、自著「西暦3700年の歯科医学史 Geschichte des Zahnheilkunde vom Jahre 3700 v. chr.」のなかで、その昔、同国人が意地のわるい当てこすりをしたと仄めかした。彼は自分はその発言をそれほど信じていなかったことを匂わせながら、Fauchard に栄誉をあたえるのは当然であると述べた。

それは、Fauchard を貶めた先人 Serre の軽率な謬見を、同国人として婉曲に否定し、仏人 Fauchard に帰すべき名誉を正当に認めたのである。もはや言責は質しようもないが、天に唾した才人 Serre は、90余年後にその飛沫を浴びることになった。

むろん、フランスでもこの Fauchard に付きまとう影をめぐって、論議がくりかえされた。その結果、1900年にパリの Lucien Lemerle が、Fauchard の著作に関する「歯科医術の歴史における注意 Notice on the History of Dental Art」という確説を発表し、彼に公正な判定をくだした。

一方、遠くアメリカにおいても、Fauchard の著書は英語に翻訳されていないにもかかわらず、正しい認識をえて高評されていた。まず、ボルチモア歯科医学校の創設者の1人であった Chapin A. Harris が、同書について最初に論評し、その価値を米国歯科界に紹介した。

つづいて、Wm. H. Trueman が、著書の内容を詳細に検討して、De Vaux が手伝ったとすることが適当であると、その例証をあげたうえで論賛している。アメリカにおいても Serre に拘泥し、その妄言に惑わされていたことをうかがわせる。

Viau と仏国

Fauchard 没後140年、その復活に1人の人物が、重要な役割を演じることになる。

彼、George Viau は、パリ歯科医学校の開校式で Fauchard を賛美した Louis Thomas の友人で、フランスでも数少ない Fauchard 研究家であった。

推測にすぎないのだが、Viau は Thomas の歴史的な演説に触発されて、Fauchard 探求にのめりこんでいったような気がする。彼は、生涯、Fauchard の発掘にひたむきな情熱を注いでやまなかった。

Viau は、長年にわたって地道な辛棒づよい調査をすすめ、露につつまれた先駆者の足跡を手さぐりに探しもとめた。そうして、パリの外科医 Cusco のコレクションの競売で入手した、1720年に画かれた Fauchard の油絵の肖像画をはじめ、St. Côme 付近の古絵図、Grand Mesnil の別邸、結婚契約書、葬儀通知書など貴重な資料を収集、先駆者の子孫をも捜しあて、生年、パリでの開業場所、別邸の所在地、結婚と夫人や子息、葬儀と埋葬場所等をつぎつぎに挙証し、Fauchard の送った生活の軌跡を次第に明らかにしていった。

その間1892年には、パリ大学医学部図書館で、偶然、夢にまでみた初版の原文原稿を見出し、この奇蹟ともいえる発見に狂喜する場面もあった。

あわせて、Dagen によって Fauchard の死亡証明書が補足され、死亡年月日も判明した。

こうして Viau は、これらの数々の証拠資料を組みたて組みあわせて、ついに、謎に秘められていた Pierre Fauchard の全体像を浮かびあがらせたのである。

それまでは、先駆者として崇めようにも、1冊の著書があるにすぎず、いかんせん、曖昧模糊として捉えどころがなかった。だが、執念にも似た Viau の努力が、その人間像を関係者のまえに具体的に再建し、古人 Fauchard の活動が確たる史実であることを立証したのだ。

それは、斯界関係者の脳裡に、偉人としてのイメージ化を促す決定的な働きをなした。

こうして George Viau は、Fauchard の発掘者としてその名をとどめることになった。翻れば、彼自身に関してはわずかに、1920年前後にパリ歯科医学校の教授兼校長をつとめていたとしか分らないが、Viau が歯科医学史上に果した功績を忘れてはならない。Fauchard の業績からいえばその復活は必然だったとはいえ、こうした後人を得たことは Fauchard にとって幸せであった。

Viau は、Fauchard の謂れなき汚名をそそぎ、彼を自国フランスの歯科医学の創始者として認知させただけでは満足しなかった。Fauchard がフランスにとどまらず、世界の先駆者に価する偉人であることを知らしめることが、彼の長年の願意であった。

とはいえ、仏語というハンディにくわえて、当時旅客飛行機はまだなく、各国との交流は不便をきわめる時代であった。1904年、アメリカのセントルイスで万国歯科会議 (International Dental Congress) が開催された。そこへ、Viau はそれまでの調査で判明した Fauchard の伝記と油絵の肖像画写真を送った。

それは、Fauchard を世界の歯科医に紹介するまたとない好機であった。その席には、アメリカの有力な臨床医たち、Burkhart, Brophy, Grieves, Thompson, Trueman, Kirk, Thorpe がいた。Viau の発表した説得力のある至論は、彼らに強い印象をあたえずにはおかなかった。このとき初めて、耳慣れない仏国先人の名前を耳にした者も少なくなかったろう。出席者たちは、18世紀前半のフランスに、世界に先き駆けた歯科医が存在していたという事実を、改めて認識したのである。

こうして、それまでフランス国内にとどまっていた Fauchard 再評価が、アメリカを中心に世界に波及することになった。異国の同学の士は Fauchard に関する文献を漁り、新しい報告に耳をそばだてたことだろう。それがまた、偉人 Fauchard のイメージを、いやがうえにも高めるのである。

1914年には、ドイツ・ブレスラウ (旧プロイセン領) の W. Bruck が自著で Fauchard を称え、彼こそ近代歯科医学の創始者にほかならない、と確言した。Serre の見解はふたたび、同国人によって完全否定されたのである。一寸見で軽々に先人を裁いた報いとして、John J.J. Serre は似非 (えせ) 学者のレッテルを貼られる運命をたどった。

さらに1920年代にはいって、アメリカの Charles MacManus と Burton Lee は、最高の尊称を献じて、Fauchard は The Father of Dentistry (歯科医学の父) であると宣言した。

1922年12月16日、Fauchard の著書脱稿200周年の記念祭が、パリのソルボンヌ大学で開催された。厚生大臣を大会会長とした同祭は、フランスの歯科医たちが自国の生んだ世界的偉人を誇らかに尊崇し敬慕する集まりであった。

席上、Fauchard 研究の第一人者 Viau は、30年におよぶ研究の成果を発表した。「Pierre Fauchard の生涯 (1678-1761), La vie de Pierre Fauchard (1678-1761)」と題するその長文の講演は、Fauchard を探求してやまなかった Viau の熱情と真情のあふれる史論であった¹⁶⁾。

彼は、Fauchard は経験を体系的に明快に解説する学識と明晰さを兼ねそなえた教育の人であると讃えたあと、その一生の歩みを自らの調査研究をまじえて論究し、それまでの伝記の不備をおぎなった。

さらに、Fauchard が不可解なる忘却を越えてカムバックするまでの興味あふれる経緯を諄々と述べ、「われわれ同じ専門領域に従事しているフランスの同僚たち、アメリカの同僚たちならびにすべての国々の同僚たちは、全員一致して、貴方がわれわれに授けてくれた偉大なる業績を賞讃するとともに、全員の名において私は貴方に深甚なる感謝の意を表する。」と、古人 Fauchard への切々たるメッセージを送っておわった。

その日は、老雄 Viau にとって人生最良の時であったろう。すべての国の同僚たちが全員一致して——そう高らかに宣言した彼の胸中には、Fauchard を探しもとめた日々が去来していたことだろう。これでもう、Fauchard は2度と忘れさられることはない……。

なお、記念祭にあわせて、Fauchard の胸像の除幕式が催された。歯科医であり彫刻家である Paul Paulin によって製作されたその胸像は、多数の参列者のまえに先駆者の英姿を再現し、ありし日の Fauchard の温容を彷彿させた。

Viau と米国

フランスにつづいて、翌1923年5月10日から13日まで行われたニューヨーク州歯科医師会年次大会にあわせて、Fauchard 著書脱稿200周年祝典が

初日に開催された。

ソルボンヌの記念祭に刺激されたのだろう、この祝典は、熱心な歯科医学史研究家 Bernhard Wolf Weinberger が、アメリカにおいても Fauchard の功績を祝うべく提案し、その開催を積極的に推しすすめたという。

第一次世界大戦後 5 年、同盟国とはいえ他国フランスの先駆者を讃える祝賀行事を催すなど、異例のことであつたらう。アメリカの同僚たちは進んで、Fauchard を世界のパイオニアの座に据えたのである。

その祝典に、Viau は「Fauchard の原稿 The Manuscript of Fauchard」と題する報告を送った¹⁸⁾。席上、Edward C. Kirk がこれを代読した。Kirk は、1895年から1917年までペンシルバニア大学歯学部長をつとめ、世界的に名高いアメリカ歯科界のリーダーであつた。

1904年の万国歯科会議からソルボンヌ記念祭にいたる Viau の研究報告を理解していた Kirk や Weinberger らが、Fauchard 像に未だにまつわりつく浮説に業を煮やし、この機会にハッキリと事実を知らしめて、愚かしい疑惑を払拭するよう、Viau に要請したのではないか。

まさに報告は、その問題を解きあかす初版のオリジナル原稿について詳説している。

彼は、原稿発見の顛末にはじまり、直接原稿を調査検討した結果を卒直に語り、De Vaux が Fauchard の原稿を訂正し、自らの見解を加筆し、著書の内容を充実する役割をはたした事実を認めたらうで、だがそれはあくまで些細な助力にすぎず、De Vaux が Fauchard にあたえた“最少の奉仕”であつたと述べ、同書は紛うかたなき Fauchard の本であると結論づけた。

そして、アメリカで Fauchard を“歯科医学の父”と認知したことによつて、「格別の礼賛をうけ、限りない賞讃を与えられているわれわれの素晴らしい先駆者の高い価値と偉大なる功績が、貴国において認識されていることを喜びつつ、私はこの研究発表を終えるとともに、この研究発表を歓迎してくれたことを感謝する。」と結んだ。

あわせて、Viau の報告を支持するように、著

THE DENTAL COSMOS

VOL. LXV.

AUGUST 1923.

No. 8

ORIGINAL COMMUNICATIONS

The Life of Pierre Fauchard (1678-1761).

By GEORGE VIAU, D.D.P., Paris, France,
PROFESSOR AND PRESIDENT OF THE DENTAL SCHOOL OF PARIS.

(Read at the Celebration of the Bicentenary anniversary of the publication of Fauchard's work, held at the Sorbonne in Paris, December 16, 1922.)

THERE are times, in the course of the centuries, when a man arises endowed with a superior intelligence, a great capacity for labor and, may I venture to say, a sort of prescience. As a result of the effort of such a mind he has devoted himself achieves a progress which several generations would not suffice to consummate. Such was Pierre Fauchard, who practiced our profession two hundred years ago. While Fauchard did not originate all he unfolds in his remarkable book, at the same time we must admit that in utilizing the unassuming works of his predecessors he made use of them merely as "watch-towers whence to gaze afar," to quote the delightful and picturesque simile of Ambroise Paré! Not content with methodically arranging the scattered works in existence before his day and turning them into a homogeneous body of doctrines, his pioneer spirit adventured into other arts and trades to cull from them instruments and processes which he adapted to his professional needs. Thus he needs mechanics, watch-making, jewelry, enameling, etc., to contribute to the development of dental prosthesis, which previously had been in a rudimentary state. In the realm of dental surgery and of operative dentistry, which joined to prosthesis gave him his full professional value, Fauchard, besides noting and coordinating the knowledge already acquired, created new curative methods. Nevertheless, while in this direction he proved exceedingly bold, he never departed from good sense and clear judgment. He remained always and above all a man of observation and an exponent of the experimental system. Nothing in his work is obscure; all is minutely described and clearness is not the least of

VOL. LXV.—31

787

図 1 「Pierre Fauchard の生涯」の第 1 頁

名な医学史家 James J. Walsh が、「近代歯科医学の父 フォンシャル Fauchard, the Father of Modern Dentistry」, ペンシルバニア大学歯学部教授 Hermann Prinz が、「Pierre Fauchard と彼の業績 Pierre Fauchard and His Works」について語り、はるか Fauchard を偲んだ。

奇しくも同じ年、ソルボンヌの記念祭に参列し、5 月に帰国した日本歯科医学専門学校の中原實が、6 月 25 日同校の日本歯科学会例会において、日本で初めて Fauchard を紹介した。これを契機に、日本でも Fauchard ブームが燃えあがることになる。

かくして同年の夏、アメリカの「The Dental Cosmos」8 月号に、ソルボンヌとニューヨークにおける Viau の報告が英文で載録された。

同誌は、S.S. ホワイト社発行によるアメリカ数の月刊歯科医学雑誌で、当時、ペンシルバニア大学から同社の副社長に転じた E.C. Kirk が編集

In order to be convinced of the efficacy of the urine Fauchard quotes from Nicolas Lemery's "Course of Chemistry" and from other authors the composition of urine as it was set down at that time. It is composed of a serous liquid nearly saturated with sal volatile and a little oil (sal volatile was the name given to certain ammonia compounds which volatilized rather readily; the reason the chemists placed this among the ingredients of the urine is that when urine breaks down on exposure to the air ammonia is formed). "These active substances," Fauchard proceeds, "cannot fail to confer upon urine certain qualities which render it very appropriate as a remedy for a number of ills. Experience has shown that the urine of healthy persons is very good for relieving the pains of gout and getting rid of obstructions of various kinds throughout the body. It must be considered a resolute capable of dissipating engorgements which form at the capillary extremities of the gums,

and the tumors which have their origin in the mouth, and can prevent and remedy a number of diseases which affect these parts. On the strength of these considerations," he says, "I have recommended the taking of healthy urine in the way suggested, and the success obtained has been most happy." For those who could not bring themselves to take urine, one could substitute for human urine "the rectified spirit of urine," which was a kind of liquid ammonia, and this should be mixed with three or four ounces of brandy and flavored with a decoction of watercress or some other substance that would make it pleasant to take.

Note. The urine of children was used during the later Middle Ages as an eye water, and as it consists of a solution of salt not far from the specific gravity of the blood, it was probably a good means of preventing osmotic processes.

110 West 74th St.

The Manuscript of Fauchard.

By GEORGE VIAU, D.E.D.P., Paris, France,
PROFESSOR AT THE DENTAL SCHOOL OF PARIS.

(Read by Dr. E. C. Kirk at the Bicentenary Celebration of the publication of Fauchard's work by the Dental Society of the State of New York, at its annual meeting May 10 to 12, New York City.)

I CONGRATULATE and thank our colleagues of the United States, assembled today in New York, for their initiative and their magnificent thought of celebrating in 1923 the bicentenary of the manuscript of Fauchard; this author himself says in his preface that this manuscript was completed in 1723.

I am glad on this occasion to give them the very flower of my work on the discovery of this manuscript and on the study which I was able to make of it.

At first I believe it well to show how I was brought to the conviction of the existence of this manuscript.

Through a catalogue with a price list of a library I learned that the manuscript of Fauchard existed and that it was a part of the collection of J. R. Duval, one of the best qualified practitioners, member of the Society of Surgery of Paris in 1813 and later on member of the Royal Academy of Medicine. Duval is the author of more than twenty works or *mémoires* pertaining to our specialty. However, I did not again find any trace of this precious document, in spite of our research, principally at the National Library.

Now, one day while I was at the Li-

図 2 「Fauchard の原稿」の第 1 頁

主幹をつとめていた。

同月号の原著欄の 3 分の 1 以上を、Fauchard 論文が占めた。Viau のソルボンヌ報告が 12 頁 (図 1)、ニューヨーク報告が 3 頁半 (図 2)、同時発表された Walsh と Prinz の講演も収録された。

そして同誌は、後段の「論説欄 Editorial Department」に Fauchard をとりあげ、その史的位位置づけについて論及した (図 3)。無署名であるが、おそらく主幹の Kirk が筆をとったものである。

「Pierre Fauchard」と題するこの史論は、ソルボンヌとニューヨークでの Fauchard 祭の模様にはじまり、「歯科医療を単なる生業から専門的職業へと向上させるために、Fauchard ほど大きな影響をあたえた人物は、歯科医学の全歴史を通じてみても他にいないだろう。」と絶賛し、彼が歯科医療を「尊厳ある専門職業」たらしめようと努

THE DENTAL COSMOS

A MONTHLY RECORD OF DENTAL SCIENCE.
Devoted to the Interests of the Profession.

EDWARD C. KIRK, D.D.S., Sc.D., LL.D., Editor.
L. PIERCE ANTHONY, D.D.S., Associate Editor.

PUBLISHED BY THE S. S. WHITE DENTAL MFG. CO., PHILADELPHIA, PA.

ORIGINAL CONTRIBUTIONS, society reports, and other correspondence intended for publication should be addressed to the Editor, Lock Box 1616, Philadelphia, Pa.

Subscription price, postpaid, to all parts of the United States and Possessions, Cuba and Mexico, \$1.00 a year; Dominion of Canada, \$1.00 a year; Australia, duty prepaid, \$4.00 a year; other countries, \$2.25 a year.

Subscriptions may be sent through dental supply houses, subscription agencies, or direct to the Business Manager, Lock Box 1616, Philadelphia, Pa.

Communications relating to advertising should be addressed to the Business Manager, Lock Box 1616, Philadelphia, Pa.

PHILADELPHIA, AUGUST 1923.

EDITORIAL DEPARTMENT

Pierre Fauchard.

At the Sorbonne in Paris, France, on the evening of December 15, 1922, a special conference of the dentists of Paris convened under the presidency of M. Paul Strauss, Minister of Hygiene, to celebrate the two hundredth anniversary of the completion of the manuscript of the first dental text-book: "Le Chirurgien Dentiste" by Pierre Fauchard.

On that historic occasion Dr. George Viau presented an exceedingly interesting and exhaustive biographical sketch of the life of Fauchard, in which he definitely settled some hitherto unknown and doubtful data relating to the date of birth and the burial of Fauchard, and which we publish in full in the present issue.

At the recent annual meeting of the Dental Society of the

821

図 3 「論説欄 Pierre Fauchard」の第 1 頁

力した、と説いた。

ついで「歯科を实践する人々や将来実践しようとする人々の利益のため、当時の歯科医学知識を記録することによって、歯科医学の発展を阻むものを打破することが、彼の願いであった。そのための彼の努力は著しい成功をおさめたので、すべての歯科医学史家たちは、彼を近代歯科医学の父とみなしている。」と述べたあと、Fauchard のおこなった治療は 200 年後の今日のそれとまったく変わらないとして、彼の世紀を超えた業績を摘記した。

終りに「Fauchard の職業上の活動に関する全記録は、歯科医学の向上と前進のために払われた非利己的な努力の人生であり、彼はフランスおよびこのアメリカで賞讃をうけるに価する人物である。また彼の業績は、歯科医学に従事する人々に最も高く感謝されるものである。」と格調高くしめくくった。

アメリカのもっとも影響力ある専門誌の、掛け値なし、偽らざる Fauchard 評価である。それは、アメリカ国内はもとより全世界へむけて、Fauchard を世界の 歯科医学の パイオニアとして位置づけたことを宣言した声明文、といえる歴史的なコメントであった。

これ以降、Fauchard の著書に疑義をはさむ声は跡を絶った。没後162年にして、Fauchard は甦ったのである。

文 献

〔Fauchard の著書〕

- 1) Pierre Fauchard: Le chirurgien dentiste, ou traité des dents, chez Jean Mariette, パリ, 1728.
- 2) Pierre Fauchard: Le chirurgien dentiste, ou traité des dents, Deuxième edition, chez Pierre Jean Mariette, パリ, 1746.
- 3) Pierre Fauchard: Le chirurgien dentiste, ou traité des dents, Troisième edition, chez Servieres, パリ, 1786.

〔Fauchard 著書の復刻版〕

- 4) Le chirurgien dentiste, ou traité des dents, Deuxième edition, Julien Prêlat, パリ, 1961.
- 5) Des Herrn Pierre Fauchard Frantzösischer Zahn=Artzt oder Tractat Von den Zähnen, Dr. Alfred Huthig Verlag, ライプツヒ, 1980.

〔Fauchard 著書の翻訳版〕

- 6) Des Herrn Pierre Fauchard Frantzösischer Zahn=Artzt oder Tractat Von den Zähnen, ドイツ, 1733?
- 7) Lilian Lindsay: The surgeon dentist or treatise on the teeth, Milford House Inc., ニューヨーク, 1969.

〔Fauchard 著書の訳文〕

- 8) 大前義文: ピエール・フォジャール著「外科歯科医」の著者序文(1), 日本歯科医史学会会誌, 5: 1, 1977.
- 9) 大前義文: ピエール・フォジャール著「外科歯科医」の著者序文(2), 日本歯科医史学会会誌, 5: 4, 1978.
- 10) 高山直秀: ピエール・フォジャール著「歯科外科医」第I章, 日本歯科医史学会会誌, 9: 2, 1982.
- 11) 高山直秀: ピエール・フォジャール著「歯科外

科医」第II章, 第III章, 第IV章, 日本歯科医史学会会誌, 9: 3, 1982.

- 12) 高山直秀: ピエール・フォジャール著「歯科外科医」表題および第I巻, 第II巻の目次, 第I巻第V章, 第IX章, 第XXIV章, 第II巻第I章, 第II章, 第III章, 日本歯科医史学会会誌, 9: 4, 1983.
- 13) 高山直秀: ピエール・フォジャール著「歯科外科医」序文及訳註, 日本歯科医史学会会誌, 10: 1, 1983.

〔Fauchard に関する著書〕

- 14) Bernhard Wolf Weinberger: Pierre Fauchard, Surgeon Dentist, Pierre Fauchard Academy インディアナポリス, 1941.
- 15) André Besombes, Georges Dagen: Pierre Fauchard et ses contemporains, Société des publications médicales et dentaires, パリ, 1961.

〔Fauchard に関する論文〕

- 16) George Viau: The Life of Pierre Fauchard (1678-1761), The Dental Cosmos, LXV: 8, フィラデルフィア, 1923.
- 17) James J. Walsh: Fauchard, the Father of Modern Dentistry, The Dental Cosmos, LXV: 8, フィラデルフィア, 1923.
- 18) George Viau: The Manuscript of Fauchard, The Dental Cosmos, LXV: 8, フィラデルフィア, 1923.
- 19) Hermann Prinz: Pierre Fauchard and His Work, The Dental Cosmos, LXV: 8, フィラデルフィア, 1923.
- 20) Pierre Fauchard, Editorial Department, The Dental Cosmos, LXV: 8, フィラデルフィア, 1923.
- 21) Georges Dagen: Points obscurs de la vie de Fauchard, Rev. France. Odonto-Stomatologie, 8, パリ, 1961.
- 22) 中原 泉: Fauchard 幻の初版考, 中原泉直言集, 書林, 1983.
- 23) 中原 泉: Fauchard 知られざる第3版, 日本歯科医史学会会誌, 10: 2, 1983.
- 24) 高山直秀: le Chirurgien Dentiste の訳語について: 「歯科外科医」か「外科歯科医」か, 日本歯科医史学会会誌, 10: 2, 1983.
- 25) 高山直秀: ピエール・フォジャール著「歯科外科医」初版と第2版の相違について, 日本歯科医史学会会誌, 10: 2, 1983.
- 26) 高山直秀: ピエール・フォジャール著「歯科外科医」の記述から推定される初版の脱稿時期,

- 日本歯科医史学会会誌, 10: 2, 1983.
- 27) 高山直秀: ピエール・フォシャール著「歯科外科医」初版の献辞について, 日本歯科医史学会会誌, 10: 2, 1983.
- (Fauchard に関する論文の訳文)
- 28) 大前義文: 近代歯学の父ピエール・フォシャールの生涯 (1678-1761) —ジョルジュ・ヴィオー著—, 日本歯科医史学会会誌, 3: 1, 1975.
- 29) 大前義文: フォーシャールの原稿の発見経過ならびにその研究, 日本歯科医史学会会誌, 4: 1, 1976.
- 30) 中原 泉: Pierre Fauchard, Editorial Department, The Dental Cosmos, LXV: 8, 日本歯科医史学会会誌, 10: 3, 投稿中, 1984.
- (Fauchard に関する事項を掲載した主な著書)
- 31) 川上為次郎: 歯科医学史, 金原商店, 1931.
- 32) 山崎 清: 歯科医史, 金原商店, 1940.
- 33) Arthur Ward Lufkin: A History of Dentistry, Lea & Febiger, フィラデルフィア, 1948.
- 34) Bernhard Wolf Weinberger: An Introduction to the History of Dentistry, C.V. Mosby Co., セントルイス, 1948.
- 35) Curt Proskauer, Fritz H. Witt: Bildgeschichte der Zahnheilkunde, Verlag M. DuMont Schauberg, ケルン, 1962.
- 36) Vincenzo Guerini: A History of Dentistry, Milford House Inc., ニューヨーク, 1969.
- 37) Joachim Gabka: De erste Zahnung in der Geschichte des Aberglaubens der-Volksmedizin und Medizin, Die Quintessenz, ベルリン, 1971.
- 38) 本間邦則: 歯学史概説, 医歯薬出版, 1971.
- 39) Walter Hoffmann-Axthelm: Die Geschichte der Zahnheilkunde, Die Quintessenz, ベルリン, 1973.
- 40) 正木 正: 新編歯科医学概論, 医歯薬出版, 1975.
- 41) Michel Dechaume, Pierre Huard: Histoire illustrée de l'art dentaire, Roger Dacosta, パリ, 1977.

Revived Fauchard

Sen Nakahara, D.D.S., D.M.Sc.
Nippon Dental University, Niigata

In 1728, one book was written by Pierre Fauchard to outline the scope of dentistry. This book consisted of two volumes and was entitled "Le chirurgien dentiste, ou traité des dents" (Surgeon dentist or treatise on teeth). By this work, his name is brilliantly left on the history of dentistry.

He had actively participated in dental practice as a French dentist in the early 18th century. Because of many turns and twists, however, it had taken more than 160 years after his death until he became immortally regarded as the Father of Modern Dentistry. This is the story of the bright and dark history about the founder of modern dentistry, in which Fauchard's activity and revival as a pioneer can be clearly shown.